「レキシコンの音韻特性」第３回研究発表会報告

場所：　青山学院大学総研ビル
日時：　２０１０年3月８日（月）午後１時～６時

発表要旨：

儀利古幹雄（神戸大学学術研究員）
「日本語における疑似複合構造と平板型アクセント」

語末に/-Cin/という音韻構造を持つ外来語のアクセントを分析し、日本語（の外来語）における疑似複合構造の存在を実証的に明らかにした。また従来の先行研究で指摘されることの少なかったタイプの平板型アクセント生起要因を示した。

松森晶子（日本女子大学、国立国語研究所客員教授）
「2 種類の重起伏音調のふるまいの違い―鳥取県の n+1 型アクセント体系を例にして―」

鳥取県湯梨浜町方言は、東京方言と同じ n+１型アクセント体系だが、１文節内に２つの高音調（重起伏）が出現する、という点が異なる。この重起伏音調は有核・無核にかかわりなく生じるが、無核語の場合に限ってある特定の条件化で消滅する場合があることを、音声データを提示しながら論じた。